

ピア・レスポンスを踏まえた作文教育による文法指導について

南 明世

DOI: 10.18999/stul.32.97

1. はじめに

本稿はピア・レスポンスを用いた作文教育による文法指導について論じるものである。ピア・レスポンスとは、「学習者が自分たちの作文をより良いものにしていくために仲間(peer)同士で読み合い、意見交換や情報提供(response)を行いながら作文を完成させていく活動方法」(池田 2004: 37-38)である。この方法は教師だけでなく、他の学習者も読み手として意識して書くことになる点で有効だとされている。本稿では特に文法における学習者の自己訂正の実態について論じる。

2. 先行研究

作文におけるピア・レスポンスの実践研究には、内容の推敲に重きを置いたものが多い。例えば、田中(2001)では、①ピア・レスポンスによって作文はどのような変化をし、どのくらい影響を与えているのか、②ピア・レスポンス後に推敲することにより教師による推敲作文の評価は向上するのかの2つの問題に対し、実際の作文授業でピア・レスポンスを実施し、その結果を添削による評価及びインタビューから検証している。その結果、「ピア・レスポンス後の推敲は約7割がピア影響であり、すべての意味変化 IU¹のうち、約9割がピア影響である」(p.16)と述べている。その上で、「第一課題において言語能力の評点かが有意に

¹ IUとはアイデア・ユニットの略で「主語と述語をひとまとまりとした内容を表す単位のこと」(田中 2001:18)である。

向上する傾向が見られたのは、フィードバックの教示とは関係なく、主に自己推敲能力によるものと推察できる。しかし、この結果をもって、語彙や文法等の言語形式をフィードバックの対象に含めないほうがよい」(p.16)と述べている。

一方、文法に関するピア・レスポンスの有効性について述べたものに池田(1999)がある。池田(1999)では、学習者に新聞の4コマ漫画のストーリーを書かせ、その後自己推敲、教師によるフィードバック推敲、ピア・レスポンス推敲推敲を行い、全体を書き直すという授業を行なった。そのうち、推敲前と推敲後の2回、担当教師とは別の教師3人が評価を行なった。その教師評価とは、全体的評価(10段階)と分析的評価(内容、構成、語彙、文法の4項目(各4段階))である。この教師の評価をもとに、推敲前と推敲後を比較し、ピア・レスポンスの効果を見た。分析は、学習者を日本語レベルによって上位群7人と下位群8人に分け、学習者の日本語レベルごとに効果を見ている。その結果、文法・語彙に関しては、上位・下位どちらのグループでもピア・レスポンスによる推敲以前より、推敲後の評価の方が高く、特に上位グループに関しては、高い数値で向上していると述べている。

その他、相互添削に関する研究に北村他(2010)がある。北村他(2010)では、作文支援システム TEachOtherS²を使用し作文授業を行なった。具体的には、学習者の「国旗の模様を説明する」「類似する国旗の共通点と相違点を説明する」というテーマに対して、(1)作文、(2)学習者によるマークアップ³、(3)システムによる問題点の指摘、(4)学習者同士の相互添削という流れで授業を行なっている。さらに、「類似する国旗の共通点と相違点を説明する」という作文に関しては、教師からのフィードバックで誤りのみ下線で指摘した上で、学習者同士に相互添削させ、1.誤字・脱字、2.口語表現、3.語彙・接続表現、4.説明不足、5.冗長、6.その他の6つの観点から、相互添削の有効性について分析している。その結果、「他の学習者の作文を添削することで内容や表現上の不備に気づき、さらには、自身の作文に対する指摘を受けて修正することにより、教師からの一方的なフィードバック以上の効果を

² 作文支援システム TEachOtherS は国立国語研究所で開発された、作文支援システムである。このシステムは作文に対して、文章の体裁や口語表現や 文体など基本的な語彙レベルの問題に対してエラーを発するので、それによって学習者はどこが問題点なのか理解することができる。さらに、システム上にコメントを載せることができるため、相互添削にも有効なソフトである。

³ マークアップとは、文章を作成する際に必要な事柄を自覚させるために、作文支援システムに載せる際に自分の作文に対して必須記述項目や文章構造にマークを入れることである。「マークアップの結果をシステムがチェックすることで、学習者が習得できていないことを自分で把握することができ、また、教師にとっても学習者の習得状況を容易に把握することが可能となる。」(北村他 2010)

生むと考えられる」と述べている。しかし、細かい文法項目の違いについては述べられていない。

そこで本稿では、具体的にどのような文法項目の間違いに対してピア・レスポンスが効果であるのか、さらにピア・レスポンスをしたことで文法的に正しい文を逆に間違えて直してしまうところにはどのような項目に多いのかについて分析していく。

3. 授業の概要

本稿では筆者(日本語母語話者)が外国人教師として中国の大学で担当した作文の授業を事例としてピア・レスポンスによる作文の授業による文法指導について考察する。筆者が勤務していたのは中国の広東省にある広東外語外貿大学南国商学院の日本語学科で、本稿では3年生31人の作文の授業で行なったピア・レスポンスについて述べる。学生の日本語レベルはおよそN2合格レベルがほとんどで、N1合格者が4人いる中上級レベルである。この大学では1年次から会話や精読、聴解などの授業があるが、作文の授業は3年次から始まるため、文法問題などは得意であるが、書くことには慣れておらず、細かい部分や構成での間違いが多い。したがって、この授業では「長い文章を正しく論理的に書けるようにすること」を目標としている。本稿では3年後期に5テーマ書かせた作文のうち、「世界滅亡の前日に何をするか」というテーマの作文を対象とする。

授業形態は1つのテーマについて3回に分けて作文を完成させるものである。1回目は導入として学生に「世界滅亡の前日に何をするか」について話し合わせた。それに関して自分の意見をまとめ、400字程度の作文を書くことを宿題とした。2回目は3人一組のグループになって、ピア・レスポンスを行なった。具体的には、各自宿題で書いてきた作文をお互いに読み合っ直させた。その際、学生に①漢字の間違いを直す、②文体の統一をす(書き言葉にする)、③わかりやすい文に直す(ここでは、語彙選択に関するものを意味しており、具体的には難しい表現を使わないこと、二重表現を避けることなどを指摘した)、④文法を直すという4つの修正ポイントを示して直させた。このうち本研究では、④の文法についてみる。3回目は、提出させた作文をもとに、教師(筆者)が助詞や主述の一致など間違いが多い箇所、注意点のフィードバックを行なった。

本論文では、2 回目に学生同士で行なったピア・レスポンスで直された項目、その後教師(筆者)が直した項目を比べ、どのような項目、文法項目は学習者同士で直せるのか、どの項目は直せないのか、また、間違っ直した項目について詳しくみていきたい。

4. 実践結果

本節では前節で論じたピア・レスポンスによる作文の誤用の修正について述べる。全体の誤用をそれぞれ①漢字の間違い、②文体の統一、③語彙選択、④文法の 4 つに分けて考察する。以下表1は、①～④のそれぞれにピア・レスポンスで指摘された誤用数、指摘されなかった誤用数、及び両者の合計を示している。また、ピア・レスポンスで指摘があったものは、正しい指摘のものと誤った指摘のものに分けてある。更に誤用例を正しく直せなかったも(誤→誤)のと、正用例を間違っ誤用と判断したもの(正→誤)とに分けてある。

表1. 語彙に関する修正率

	ピア・レスポンスでの指摘あり			ピア・レスポンス での指摘なし	誤用数の 合計
	正しい指摘	誤った指摘			
		誤→誤	正→誤		
①漢字	33(86.8%)	0(0.0%)	0(0.0%)	5(13.2%)	38(100%)
②文体の一致	49(77.8%)	3(4.8%)	1(1.6%)	10(15.9%)	63(100%)
③語彙選択	25(49.0%)	1(2.0%)	5(25.0%)	20(39.2%)	51(100%)
④文法	93(47.0%)	9(4.5%)	11(5.5%)	85(42.9%)	198(100%)
合計	200(57.1%)	13(3.7%)	17(4.9%)	120(34.3%)	350(100%)

表1を見ると、文法の誤用が最も多く、次が文体の一致の誤用、語彙選択の誤用、漢字の誤用の順で誤用が多いことが分かる。このうち、漢字と文体の一致との誤用に関しては、ピア・レスポンスによって正しく指摘されているものがおよそ 80%あり、学習者同士で直すことができることが分かる。これに対し、語彙選択や文法に関しては、正しく指摘されたものがおよそ 50%であり、学習者の指摘で直せるものは半数程度しかないことが分かる。特に、ピア・レスポンスでの指摘ができないものは 40%近くあり、教師による指摘が必要だと考えられる。次に具体的にどのような誤用があったのかを見る。

①漢字の間違い

漢字の間違いには、(a) 中国の簡体字を使ったもの、(b) 既習の語を平仮名で書いたもの、(c) 間違った漢字が書いてあるものがあつた。以下、括弧の中が添削後のものである。

(a) 員(員)、・亲(親)、亿・(億)、・类(類)、・灭(滅)、・満(満)、・洁(潔)

真(真)、戻・(戻)

(b) もっとも(最も)、しる(知る)

(c) 柯基(コーギー)、挑んで(選んで)、持ち(待つ)、食べたい者(食べたい物)

これらは、学習者同士の相互添削で概ね直すことができおり、指摘されたものに誤りは見られなかった。一方、学習者が指摘できず、教師が指摘したものは次の5例だけであつた。漢字に関しては概ね学習者同士で相互添削ができているようである。

(a) 择(択)、后(後)

(b) 該当なし

(c) 味しい(美味しい)、制る(作る)、住でいる(住んでいる)

②文体の統一

文体の統一に関しては、次のような添削が多く見られた。

だから(そのため)、でも(しかし)、あいつ(あの子)、から(ので)

～とか～とか(～や～など)、なきや(なくてはならない)、いろいろな(様々な)

また、「です・ます」体で書かれたものは、「だ・である」体にするようにと学習者同士でチェックがされていた。文体の統一に関してはもともと間違いが少なく、文体が不一致であるにもかかわらず指摘されていないところは10例のみで、文体の不一致の過ちのうち15%ほどであつた。具体例を以下に示す。

こんなの(このような)、いっぱい(多くの)、じゃない(ではない)、です(だ)(2例)、ます(だ)、とか〜とか〜(や、など)、ものなんか(ものなど)、そんな(そのような)、だから(そのため)

一方、ピア・レスポンスで誤った指摘がされたものは4例みられた。そのうち、誤→誤が3例、正→誤が1例みられた。

誤→誤：こういう風(こんななら)、自分の以前の前(自分の前)
あるわけで(というわけで)

正→誤：だから(ですから)

文体の統一に関しては学習者同士のピア・レスポンスで概ね直すことができるようである。

③語彙選択

ピア・レスポンスで、語彙選択に関する誤用で指摘されたものは31例で、そのうち正しく修正されたものは、25例であった。このうち、その例を下に示す。

答案(答え)、あの日(その日)、開催する(開く)、あなたの(他の人の)
私にとって(私の場合)、約束を仕上げたい(約束を守りたい)、当地(その土地の)

一方、指摘があっても、その指摘を間違えているものは次の6例見られた。

誤→誤：死ぬことはない(死んでいない)

正→誤：恐れない(心配がない)、元気(健在)、遊ぶ(見る)
終わってから(おわっての)、すべきだ(したい)

しかし、以下のような語はピア・レスポンスでの指摘が見られなかった。

何年前(数年前)、悪玉(悪者)、ピラミット(ピラミッド)、この前(その前)、
協同して(協力して) 大目なお金(多くのお金)

語彙選択に関しては、漢字・文体の一致に比べ、半数近くがピア・レスポンスでは直せていない。また、誤った指摘の割合も漢字や文体の一致に比べて高い。

5. 文法に関する修正

次に、文法に関してどのような間違いに対して指摘があったのか、なかったのか詳しく見ていく。ここでは、文法を①格助詞、②活用、③時制、④主述の一致、⑤動詞他動詞、⑥名詞化、⑦使役及び受け身、⑧動詞の自他、⑨その他の9つに分けて考察する。次の表2に文法に関するそれぞれの修正率を示す。

表2. 文法に関する修正数と修正率

	ピア・レスポンスでの指摘あり			ピア・レスポンスでの指摘なし	誤用数の合計
	正しい指摘	誤った指摘			
		誤→誤	正→誤		
①格助詞	27(42.9%)	1(1.5%)	4(6.3%)	31(49.2%)	63(100%)
②活用	14(40.0%)	0(0.0%)	1(2.9%)	18(54.5%)	33(100%)
③時制	20(80.0%)	0(0.0%)	1(4.0%)	4(16.0%)	25(100%)
④文末表現	10(43.5%)	3(14.3%)	1(4.8%)	7(30.4%)	21(100%)
⑤名詞化	3(20.0%)	1(7.7%)	1(7.7%)	8(53.3%)	13(100%)
⑥使役・受身	3(37.5%)	1(12.5%)	1(12.5%)	3(42.9%)	8(100%)
⑦動詞の自他	2(50.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(50.0%)	4(100%)
⑧その他	15(51.7%)	4(13.8%)	0(0.0%)	10(34.5%)	29(100%)
合計	94(48.0%)	10(5.0%)	9(4.5%)	83(42.3%)	196(100%)

表2から、格助詞、活用、時制、文末表現、名詞化、使役・受身、動詞の自他の順に誤用の数が多いことがわかる。また、ピア・レスポンスでの指摘があったものを見ると、ほとんどの場合正しく直されていることがわかる。しかし、ピア・レスポンスでは指摘がされなかったもの、つまり間違いに気がつかなかったものもある。特に、格助詞、活用、名詞化はおよそ50パーセント指摘されていなかった。このことから、誤りに気づけば直せるが、誤りに気付きにくい項目があることがわかる。以下、それぞれの項目別にどのような誤用があったのか見ていく。

5.1 格助詞

まず、ピア・レスポンスによる文法事項の修正のうち、格助詞の修正について見る。表 3 は指摘ありと指摘なしでそれぞれ格助詞ごとに誤用が何例あったのかを示している。()の中は修正された後のものである。また、 ϕ は格助詞が脱落していることを表す。

表 3. 格助詞の誤用

	は (が)	が (は)	を (に)	ϕ (を)	ϕ (に)	に (を)	を (が)	その他 ⁴	合計
指摘あり (正しい)	4	4	3	2	2	1	2	9 ⁵	27
指摘あり (間違い)	1	1	0	0	1	0	0	2 ⁶	5
指摘なし	1	1	2	2	0	4	2	19 ⁷	31

表 3 からは、「は」と「が」の誤用や「を」と「に」の誤用が多いことが分かる。具体的な誤用について見てみる。(1)～(5)は正しい指摘があったものの例である。

- (1) 私は(が)もっともやりたいことを話しよう。
- (2) 自分の命を(は)自分の意思によって自由に決めることが欲しい。
- (3) 神様を(に/から)助けてもらおうといことだ。
- (4) 今までの人生の(に)食べたいものは全て試食する。
- (5) ずっと好きなアイドルを(に)会って、

一方、指摘ありのうち、誤った指摘があったものを(6)～(10)に示す。

⁴ 表 3 の「その他」は指摘ありも指摘なしも 1 例以下のものを「その他」とした。

⁵ 指摘ありのうち、正しい指摘は他に 9 例(「で(を)」「を(は)」「に(で)」「が(も)」「が(ϕ)」「で(に)」「に(が)」「で(の)」「 ϕ (が)」)が 1 例ずつ見られた。

⁶ 指摘ありのうち、正→誤の誤りは他に 2 例(「は(に)」「の(に)」)が 1 例ずつ見られた。

⁷ 指摘なしのうち、他に 19 例(「と(に)」「は(か)」「で(か)」「に(ϕ)」「が(を)」「とは(のは)」「は(を)」「に(から)」「と(を)」「は(ϕ)」「で(に)」「は(で)」「が(には)」「にも(も)」「に(の)」「に(で)」「へ(を)」「 ϕ (は)」「が(ϕ)」)が 1 例ずつ見られた。

- (6) 今までの人生の(に)食べたいものは、
- (7) その日に(に)自分でゆっくり過ごしたい。
- (8) その前は(に)海底のような危ないところへ探検する勇気はない。
- (9) ライオンは(が)鋭い歯を持って、獲物を追いかけている。
- (10) 世界滅亡の前日は(が)人生最後の日だ。

(6) (7)は誤用から誤用への指摘、(8)は正しいものから誤用への指摘、(9) (10)は必ずしも修正しなくても良いものである。

ピア・レスポンスでの指摘がなかったものは以下のものが見られた。

- (11) 自分の生活を(が)嫌になる。
- (12) 父と(を)かつてない旅行を(に)連れて行くつもりだ。

文法項目のうち、格助詞は最も多く誤用の見られる項目であった。その上、ピア・レスポンスにおいて間違いが指摘されなかったものがおよそ半数あった。もし、間違いを発見できれば概ね正しく直すことができるようだが、まず間違い自体を見つけることが難しいようである。この点は教師による指摘が必要であると思われる。

5.2 活用

次に活用について見る。以下、動詞活用、形容詞活用、形容動詞活用に分類し、どのような間違いがあったかを見る。表4はそれぞれの誤用数である。

表4. 活用の誤用数

	動詞	形容詞	形容動詞	合計
指摘あり(正しい)	9	2	3	14
指摘あり(間違い)	0	1	0	1
指摘なし	15	2	1	18
合計	24	5	4	33

表 4 から、活用の誤用は動詞が最も多く、次に形容詞、形容動詞の順で多いことがわかる。また、指摘ありが 14 例、指摘なしが 18 例と指摘なしの方が多くことから、活用の誤用は学生同士のピア・レスポンスでは発見しにくい項目だと言えよう。以下、具体的な例を見てみる。

まず、動詞については以下のような例が見られた。動詞に関しては、活用の問題と形容詞あるいは形容動詞と間違えた場合の 2 つに分けられる。動詞の活用の間違いに関しては、「買って」などのタ行五段、ラ行五段、ワ・ア行五段動詞に見られる促音便で特に間違いが多く見られた。動詞の間違いは、特に指摘ありが 9 例、指摘なしが 15 例と指摘なしが多く学習者動詞のピア・レスポンスで直すのが難しい項目だと考えられる。

- (13) 指摘あり(正しい): 買った(買った)、足りるので(足りるので)、味わた(味わった)
- (14) 指摘あり(間違い): 該当なし
- (15) 指摘なし : 飲んで(飲んで)、眠って後(眠った後)、喜びでしょう(喜ぶでしょう)

次に形容詞について見る。形容詞に関しては、名詞と間違えているものが多く見られた。特に、連体修飾での間違いがある。また、「ない」形に接続する誤りも間違った指摘と指摘なしで見られた。

- (16) 指摘あり(正しい): 怖くを(怖さを)、悲しみ気持ち(悲しい気持ち)
- (17) 指摘あり(間違い): 悔いのない(悔いくない)
- (18) 指摘なし : 大くの袋(大きい袋)、怖けない(怖くない)

最後に形容動詞についてみる。形容動詞に関しては「好きだ」の誤用が正しい指摘ありと指摘なしで 2 例、「したいこと」や「してはいけないこと」のように「こと」の前を形容動詞のように「な」を入れてしまう誤用が 2 例見られた。

- (19) 指摘あり(正しい): 好きものだ(好きなものだ)、したいなこと(したいこと)
してはいけないなこと(してはいけないこと)
- (20) 指摘あり(間違い): 該当なし
- (21) 指摘なし : 好きなので(好きなので)

5.3 時制（テンス・アスペクト）

時制の誤用は過去形、アスペクトで見られた。表5は過去形とアスペクトの誤用に関して正しい指摘あり、間違っただ指摘あり、指摘なしに分け、それぞれ誤用数を示したものである。過去形のものについては、過去形にすべきところで普通形にしているもの（る形→た形）と、普通形にすべきところで過去形にしているもの（た形→る形）でさらに分けている。

表 5. 時制の誤用数

	過去形		アスペクト	合計
	る形→た形	た形→る形		
指摘あり(正しい)	12	5	3	20
指摘あり(間違い)	0	1	0	1
指摘なし	1	1	2	4
合計	13	7	5	25

表5の時制全体の誤用数から、25例中21例が学習者同士のピア・レスポンスで直っていることがわかる。

まず、過去形のうち正しい指摘があった誤用としては、(20)～(21)のようなものが見られた。(20)は「る形→た形」の間違い、(21)は「た形→る形」の間違いである。

(20) 今まで実現しない(しなかった)。

(21) 明日は世界滅亡の日、(中略)おいしい食事をするに尽きた(る)。

誤った指摘のものは(22)の1例しか見られなかった。これは、正用から誤用へと指摘されてしまったものである。

(22) 以前、私は落ち込んだ時には、おいしいものを食べると元気がなった(*なる)。

指摘なしの誤用は2例のみであった。(23)(24)に示す。(23)は「る形→た形」の間違い、(24)は「た形→る形」の間違いである。

(23) 私は以前私をいじめた人を殴る(殴った)。

(24) 目覚めの時腹は空いた(空く)。

過去形に関しては、間違った指摘や指摘なしが 3 例見られるものの、その他 17 例が学習者同士のピア・レスポンスで直せていることがわかる。

次にアスペクトについて見る。アスペクトの誤用については正しい指摘の例が(25)～(27)の 3 例見られた。

(25) 死亡に直面しているという(する)ことができる。

(26) ガンでもうすぐ死んでいる(死んでしまう)お年寄り。

(27) 小さい頃からよくテレビで動物世界というドキュメンタリーをみる(みている)。

指摘がなかったものに関しては、(28)(29)の 2 例見られた。

(28) 私はこの友情を大切にする(している)。

(29) 彼女の文字は不思議な力がある。読者は読んだ後、いつも落ち着いている(落ち着く)と思う。

時制に関しては、全体的に過去形の間違いが 13 例とアスペクトの 5 例より多く見られ、特に過去形にすべきところで普通形を使用しているもの(る形→た形)に対する正しい指摘が多いことがわかる。

5.4 文末表現

文末表現の間違いは、文末の「だ」の脱落や過剰使用、モダリティ表現、その他の 4 つに分けた。その他は主語と述語が正しくないものをさす。表 6 でそれぞれ正しい指摘あり、間違った指摘あり、指摘なしで誤用例を示す。

表 6. 文末表現の誤用数

	「だ」の脱落	「だ」の過剰	モダリティ	その他	合計
指摘あり(正しい)	4	2	1	3	10
指摘あり(間違い)	2	1	0	1	4
指摘なし	0	3	2	2	7
合計	6	6	3	6	21

表 6 から、「だ」の誤用が 12 例と半数近くあることがわかる。具体的には(30) (31)のようなものである。(30)は「だ」が脱落している例であり、(31)は「だ」が過剰に書かれている例である。

(30) これは考えるべき問題だ(だ)。

(31) 生き残るだ(ϕ)。

しかし、「だ」の脱落及び過剰の間違いが正しく指摘できなかったものは(32)の 2 例みられた。どちらも正用のものに対して誤用だと指摘されたものであり、両者とも「だ」の脱落の間違いである。

(32) 綺麗だ(ϕ)と思う、幸いだ(ϕ)と思う

「だ」の脱落及び過剰の誤用で指摘がなかったものは(33)の 3 例見られた。3 例とも「だ」の過剰使用である。

(33) 良いだ(ϕ)、いないだ(ϕ)とおもう、わかりだ(る)

「だ」の間違いは正しく直せたものが 6 例、間違った指摘のもの、指摘がなかったものも 6 例とちょうど半分に分かれる結果となった。つまり、「だ」の間違いは必ず学習者同士で直せるとは言い難く、教師のフィードバックが必要であると考えられる。

次にモダリティについて見る。モダリティは正しい指摘があったものが(34)の 1 例、指摘なしのものが(35) (36)の 2 例と、合計 3 例であった。

- (34) もし飛行機で夕日を見たら、本当に幸せφ(だと思う)。
(35) 海女というドラマを見てから、いつも自分の手でウニをとってみたいφ(と思っている)。
(36) 私はたくさんのことをやりたい。特に以前はしてはいけないこと、そして意味があることφ(をしたい)。

最後にその他について見る。その他は(37)～(39)の正しい指摘あり 3 例、(40)の間違った指摘 1 例(誤用→誤用)、(41)(42)の指摘なし 2 例の合計 6 例が見られた。どれも、主語がなかったり、述語の「ことだ」が抜けていたりする例である。(38)に関しては、「これは」がなくても意味がわかるので、間違いとは言えないが、正用への指摘である。

指摘あり(正しい)

- (37) 人の最大の苦痛は、死亡の過程ではなく、死の過程を待っているφ(ことである)。
(38) 中国の歴史や建築が好きな父にはφ(これは)一番嬉しいことだ。
(39) 今一番大切なことは今を生きるφ(ことだ)。

指摘あり(間違い、誤用→誤用)

- (40) 高校時代寮の友達と約束があった。(それは) φある日、一緒に海に行く φ(のだ)。
→正しくは「ことだ」

指摘なし

- (41) 私が一番やりたいのは家族と一緒にいるφ(ことである)。
(42) 私がぜひしたいことは街で見知らぬ人に「愛してる」と言うφ(ことだ)。

文末表現に関して、「だ」の脱落、「だ」の過剰使用、モダリティ表現の脱落、その他(主に「ことだ」の脱落)についてそれぞれみた。それぞれ数は他の項目に比べ少ないものの、共通して見られる誤りである。ピア・レスポンスで正しく指摘できているのが半数しかなく、学習者同士での指摘が難しいと考えられる。

5.5 名詞化

名詞化に関しては、今回の作文では15例しか誤用が見られず、格助詞や活用に比べて誤用は少なかった。以下、名詞化における誤用である。正しい指摘があったものは(43)の3例、誤用から誤用への誤った指摘があったものは(44)の1例、指摘がなかったものは(45)の8例見られた。

(43) 指摘あり(正しい): 臆病者のの(ϕ)みたい、少しの(ϕ)時間、全ての(ϕ)人類

(44) 指摘あり(間違い): 離れる。いいと思う(離れるの(ϕ)はいいと思う)

(45) 指摘なし : いるの(ϕ)ほうがいい、自分の(ϕ)好きな、つけるの(ϕ)感じ、
同じの(ϕ)嘘(3例)、扱うの(ϕ)ため、知り合ったの(ϕ)は縁だと思

「の」の名詞化に関しては、指摘ありが3箇所、間違っただ指摘が2箇所、指摘なしが8箇所と全体的に誤用の数は少ないものの、指摘がないものが比較的多く、やはり中国人学習者にとって習得が難しいものだと考えられる。

5.6 使役・受身

次に使役及び受け身について見てみる。この項目の誤用は正しい指摘ありが3例、間違っただ指摘ありが2例、指摘なしが3例と全体で8例しか見られなかった。

まず、正しい指摘があったものに(46)の3例がある。受身「られる」が必要な場合に使用できなかった脱落の例が2例、受身「られる」が必要でない場合に使用した過剰の例が1例である。

(46) 受身の脱落: 美味しいものが見つけら(ϕ)れる、食べら(ϕ)れない
受身の過剰: 送れら(ϕ)れない

間違っただ指摘があったものは、(47)(48)の2例であった。(47)は誤用から誤用への指摘であり、使役受身から受身にしようと思って間違えたものと見られる。一方、(48)は正用から誤用の指摘であり、受身を使用すべき場合に使用すべきでないと間違っただ指摘してしまったものである。

- (47) この避暑地が私に発見させられる(される(正しくは「される」))かもしれない
(48) 一旦彼らに標的として狙われたら、すぐ食べられる(食べた)恐れがある。

最後に指摘がなかったものについては、(49)～(51)の 3 例見られた。(49)は使役(させる)を使用する場合に受身(される)を使用した間違い、(50)は受身の間違い、(51)は受身を使用しない場面で使用した過剰使用の間違いである。

- (49) 海は人の心を落ち着けされる(させる)力がある。
(50) (ライオンは)小さい頃から人に世話をられて(されて)、
(51) お金を贅沢に使い切れて(切って)、美味しい食べ物をたくさん食べに行こう。

以上から、使役・受身に関して、8 例のうちおよそ全てが受身に関わる誤用であることがわかる。(49)は使役の間違いでもあるが、これは使役の場合に受身にした誤りであるため、受身も関わっていると考えられる。更に誤用を見ると、受身の脱落が 2 例、受身の過剰使用が 3 例、受身の形の間違いが 2 例、使役を受身にしたものが 1 例見られる。単純な受身の脱落・過剰は正しく指摘されているが、誤った指摘や指摘なしが半数以上占めているため、学習者同士で直すのはやはり難しい形式だと考えられる。

5.7 動詞の自他

動詞の自他に関しては、全体で 4 例しか見られなかった。正しい指摘があったものが(52)(53)の 2 例、間違った指摘の例はなく、指摘がなかったものが(54)(55)の 2 例見られた。

指摘あり(正しい)

- (52) 言うべきことと言えないことが分けている(分かれている)。
(53) 世界滅亡の前日、必ずこの夢を叶いたい(叶えたい)と思う。

指摘なし

- (54) この重要な 1 日をかかって(かけて)、美味しい食べ物を楽しむ。
(55) 私はいろいろなことをしたいですが、しかし、私は最後決まる(決める)のは、自分の以前の人生にずっとしたいでも、様々な原因でできないこと、全部するつもりです。

4例と少ないものの、指摘されなかった誤用も半数見られた。

5.8 その他

その他には、文全体に見られる誤用、及びその修正が見られた。例えば、(56)(57)のように文をわかりやすく言い直したのがある。これらは正しく指摘できていた例である。

(56) 私の田舎は海に臨む。(私は田舎出身でそこは海に臨む。)

(57) 少し馬鹿馬鹿しいみたいな感じけれども (少し馬鹿馬鹿しいけれども)

しかし、誤った指摘には(58)(59)のように学習者同士で誤りには気づき、直そうとはするが、うまく修正ができないものが見られた。

(58) 全部無料、任意に取ることができる(無料ので)

(59) 私と犬は海辺に座って、今世の嬉しい事、悲しいこと一つ一つを回想して、死亡を待つ。

(私と犬は海辺に座る。今世の嬉しい事、悲しいこと一つ一つを回想する。それに、死亡を待つ。)

(58)は接続助詞「ので」を入れた点はいいが、「無料」は形容動詞なので、「無料なので」とすべきである。また(59)は長い文を短くし、接続詞を入れようとした点はいいが、接続詞を失敗した場合である。この場合は、「それに」ではなく、「そして」を入れるべきである。

指摘がなかったものには(60)のような例も見られた。文体の一致として「だから」から「したがって」のようなものは正しく使っても、文脈から接続詞を選択するのは学習者同士では指摘しにくいと考えられる。

(60) もし世界が間もなく滅亡するφ(なら)、私はたかさんのことをしたい。

6. まとめ

本稿では、ピア・レスポンスによる相互添削の実態について項目別に見た。漢字の誤り、文体の統一に関してはおよそ 80%が学習者同士のピア・レスポンスで正しい指摘ができていた。文法は全体で見るとおよそ半分が指摘されていない誤りであり、漢字や文体の一致がおよそ 10 であるのに比べ、学習者同士で気づくのが難しいと考えられる。文法項目別に見た場合、指摘がない誤りが時制の項目では 15%、文末表現の項目では 30%であるのに対し、格助詞、活用、名詞化、使役・受身、動詞の自他の項目ではおよそ 50%学習者同士での指摘がない誤りが見られた。つまり、時制、文末表現の項目では比較的正しく直せていたが、格助詞、活用、名詞化、使役・受身、動詞の自他の項目では正しく直せていなかった。文法項目に関して教師のフィードバックがいる項目といない項目があると考えられる。特に格助詞や活用に関しては誤用数も多いあるため、教師のフィードバックが必要であることがわかった。これについて、さらにデータを増やして分析を見ていきたい。

[参考文献]

- 池田玲子(1999)「日本語文におけるピア・レスポンスの効果—中級学習者の場合—」『言語文化と日本語教育』17, 36-47
- 池田玲子(2004)「日本語学習における学習者同士の相互助言(ピア・レスポンス)」『日本語学』23(1), 36-50
- 北村雅則, 山口昌也(2010)「相互添削を取り入れた作文授業の設計と実践」『日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集』
- 田中信之(2011)「ピア・レスポンスが推敲作文に及ぼす影響—分析方法とフィードバックの教示に注目して—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3, 9-20